

# 堀田雄大の図画工作科（第3学年）研究計画

## 1 本研究で目指す子ども

図画工作科表現A(1)の「材料を基に造形遊びをする活動(以下、造形遊び)」で重要なのは、子どもが「思いのままに発想や構想を繰り返し、経験や技能などを総合的に活用」することである(学習指導要領解説)。特に第3学年及び第4学年では、「材料や場所を基に造形遊びをする」となり、子どもは材料や場所<sup>※1</sup>とかかわりながら造形活動を行っていく。

これまでの造形遊びの指導では、材料や場所を提示されても、材料でつくることで満足し、提示された材料と場所とを組み合わせてつくったり遊んだりできない姿や、よりよい表し方(=よりよいつくり方・遊び方、以下「よりよい表し方」)を見いだすことができない姿が見られた。具体的には「材料を場所にどう組み合わせればよいかは分からない。けれど、材料を組み合わせたら、△△ができた。これでいい」「△△というものがあった。けれど、次はどうすればもっとよくなるだろう。思い付かない」といった姿である。

この原因は2つある。1つ目は、子どもに提示する場所の特徴を活動の中でだけとらえさせていたことである。例えば、「この材料とこの場所で、つくったり遊んだりしてみよう」と課題を設定し、活動させる指導である。これでは子どもは、例え場所の特徴に気付いても、その特徴に組み合わせようという意識がないまま活動が行われるため、材料の特徴との組み合わせ方が考えられず、材料でつくることだけで満足してしまう。

2つ目は、活動中、子どもが考えた材料と場所を組み合わせた表し方を共有させていなかったことである。その場所でどのような表し方をすると、どんなことができるのかを子どもに共有しないまま材料と場所を与えていた。そのため「結局、材料と場所で他にはどのように表せばよいのだろう。とりあえずつくったり遊んだりしたけれど、他には思い付かない」といった子どもになっていたのである。

そこで私は、第3学年の図画工作科において、**材料と場所の特徴を組み合わせ、よりよい表し方を見いだして表す子ども**を目指す。具体的な姿は「材料を△△して○○ができた。工夫した点は、○○がもっと□□になるようにしたことだ。この工夫は、☆☆さんがやっていたことをもとにして、自分なりに考えてできた」などと考えて表現をする子どもである。場所の特徴とは、「隙間、穴、陰、傾斜」といった空間的な特徴と、「動く、光る」などの体感する特徴のことである。このうち体感する特徴は、子どもが見たり聞いたりして気付くことはできるが、実際に材料と組み合わせなければ感じることはできない。つまり、子どもが材料と場所を組み合わせ、よりよい表し方を見いだしていくためには、この体感する特徴を自ら組み合わせようとして意識付けることが必要である。

そのために2つの改善を行う。1つ目は、場所の特徴については、子どもに体感する特徴を想起させる創作話と活動のセットでとらえさせて、材料との組み合わせ方を考えさせることである。2つ目は、表現に行き詰った子どもに、子ども同士の表し方を共有させ、よりよい表し方を見いださせることである。

このようにして目指す姿は、今後子どもが様々な造形活動に取り組む際、よりよい表し方を見いだす過程で、自ら発想や構想を繰り返していくことにつながっていく。

※1 学習指導要領解説では、材料とは「木ざね、空き容器、何かの部品など」とあり、場所とは「児童が発想する場所のこと」で、机の下の隙間、植え込みの陰、水溜まりのある場所、傾斜地など」とある。

## 2 主張する働き掛け

### (1) 「中核的な学習内容」

材料と場所の特徴を組み合わせ、よりよい表し方を見いだして造形遊びをすること

### (2) 「学びをつなぐ力」

- ① 関係付けるすべを用いて、既存の知識や経験を基に、材料と場所とを組み合わせた表し方(情報)を収集し、つくったり遊んだりする力
- ② 関係付けるすべや比較するすべを用いて、これまでの自分の表し方に、友達の表し方を取り入れて、よりよい表し方を見いだす力

### (3) 働き掛け

まず、材料との魅力的な出合いを仕組む。導入では創作話を提示し、造形活動への目的意識をもたせる。その後材料のみを使った造形活動を行わせる。すると子どもは「この材料では、△△という特徴があり、○○ということができた(C0)」などと材料の特徴をとらえる。このような子どもに、次のように働き掛ける。

#### 働き掛け1

材料と、特徴のある場所を提示しどんなことができそうかと問う。

提示された場所に対する問い(思い)をもたせるための働き掛けである。**材料と、特徴のある場所(「対象①」)**を提示する。子どもは、場所を見たり、又は音を聞いたりして、提示された場所の空間的な特徴や体感する特徴に気付く。そして、「この場所でどんなものを表せるだろう」や「こ

の場所では〇〇が表せそうだ。してみたいな」などと問い（思い）をもつ。そこで、「この場所で、どんなことができそうか」と問う。子どもは、場所の特徴を基にできそうなことを考える。これをワークシートに記述させる。このように、空間的な特徴や体感する特徴に気づき、そこでできそうなことを記述している姿が見られたら、場所に対する問い（思い）をもったと判断する。

#### 働き掛け2

**体感する特徴を想起させる創作話を提示し、活動に取り組ませる。**

提示された場所の特徴と材料とを組み合わせた表し方を考えさせるための働き掛けである。子どもは、「この場所で〇〇ができそうだ。してみたい」などと考えている。そこで**体感する特徴を想起させる創作話（「対象②」）**を提示する。そして、創作話の内容を確認してから、材料を用いた造形遊びを提案する。子どもは、できそうだと思うことを試す。この際、材料と場所の特徴を組み合わせる活動する。このとき子どもは、**関係付けるすべ**を用いて、既有的知識や経験を基に、材料と場所を組み合わせた表し方（情報）を収集して、つくったり遊んだりする。

その後活動を続けると、一通りつくったり遊んだりして満足し「他にどんなことをしようかな」などと、表現に行き詰まりを感じる子どもも出てくる。このような状態が見られたら、次のように働き掛ける。

#### 働き掛け3

**子どもが材料や場所とかかわっている様子のスライドショーを提示する。**

発想や構想を繰り返して、よりよい表し方を考えさせるための働き掛けである。**子どもが材料や場所とかかわっている様子のスライドショー（「対象③」）**を、提示する。子どもは、スライドショーを見て、自分には無かった友達の表し方や、材料の新しい表し方、場所での新しい表し方に気付く。そして子どもは**比較するすべ**や**関係付けるすべ**を用いて、これまでの自分の遊び方やつくり方に、友達の遊び方やつくり方を取り入れて、よりよい表し方を見いだす。

#### 「学びをつなぐ力」の自覚を促す働き掛け

**活動を通してできたことの具体を成果物や記録物を基に振り返らせる。**

学びをつなぐ力の自覚を促す働き掛けである。活動の過程では、「今、どんなことをしているの」「お気に入りのところや工夫はありますか」「それは、どうやったらできるの」「それは、どうやってつくったの」などと、材料と場所の特徴を組み合わせている様子を個別やグループで振り返らせる。活動の終末では、振り返りワークシートを配付し、「①材料を使ってどんなことをしたか」「②工夫したところはあるか」「③工夫のもとになっているものは何か」という視点で振り返りを記述させる。こうすることで子どもは「材料を△△して〇〇ができた。工夫した点は、〇〇がもっと□□になるようにしたことだ。この工夫は、☆☆さんがやっていたことをもとにして、自分なりに考えてできた」などと振り返り、学びをつなぐ力を自覚する。このようにして、**材料と場所の特徴を組み合わせ、よりよい表し方を見いだして表す子ども**となる。

### 3 検証

#### (1) 検証すること

- ① 構想した働き掛けにより、「中核的な学習内容」を創り出すことができたか。
- ② 構想した働き掛けにより、「学びをつなぐ力」を発揮することができたか。
- ③ 構想した働き掛けにより、「学びをつなぐ力」を自覚することができたか

#### (2) 検証の方法

##### (2) 検証の方法

- ① 働き掛け3において、材料と場所の特徴を組み合わせ、題材ごとに設定するよりよい表し方の基準に当てはまる表し方を見いだしたかどうかを、活動の様子や発言から検証する。
- ② 働き掛け2において、材料の特徴と場所の特徴を組み合わせつくったり遊んだりしているかどうかを、活動の様子や発言から検証する。（つなぐ力①）  
働き掛け3において、友達の表し方を取り入れて、題材ごとに設定するよりよい表し方の基準に当てはまる表し方をしているかどうかを活動の様子や発言から検証する。（つなぐ力②）
- ③ 働き掛け4において、比較するすべや関係付けるすべを用いて、これまでの自分の表し方に、友達の表し方を取り入れて活動したことを自覚しているかどうかを、振り返りのワークシートから検証する。

### 4 年間の授業計画

- (1) 指定研究授業(6月) 「A Hole New World～毛糸を使ってゆらゆらビヨンビヨン～」(5時間)
- (2) 中間検討会(9月) 「You Good!カラフルきらきら色水の魔法」(5時間)
- (3) 初等教育研究会(2月) 「プラスチックでロマンチック～光の樹の世界～」(6時間)